成果報告書

慶應義塾大学 総合政策学部 4 年 比企野杏

◆発表概要

・学会：31st Conference on Pattern Languages of Programs, People, and Practices

・参加期間：2024 年 10月13日 ～ 2024 年 10月16日

・開催形式：対面

・発表形式：ライターズ・ワークショップ

・タイトル：Portraits of Passionate Creators of Pattern Languages of Practices in Japan

◆ 研究概要

本研究では、日本で実践のパターン・ランゲージを作成している作り手 5 名に対して実施したインタビューから、独自の分野や立場で実践のパターン・ランゲージを作成し、新たな領域に適用している情熱的な作り手たちが、なぜパターン・ランゲージを作成しようと思ったのか、そしてパターン・ランゲージの何に魅せられ、どのような思いで作成してきたのかを描き出した。

本論文で取り上げているのは、様々な表現方法を試す中でパターン・ランゲージに出会い、認知症に関するパターン・ランゲージを学生とともに作った人物、部署を異動する度に、異なる領域でパターン・ランゲージを作っている地方自治体職員、パターン・ランゲージを作成、活用して行政の仕事に実装し続けている地方自治体職員、パターン・ランゲージを作成し、授業で活用したりその成果の論文を学会に投稿し続けている大学教員、多様な依頼者のパターン・ランゲージ制作をサポートし、さらなるパターン・ランゲージの情熱的な作り手を増やしていっている人物の 5 名である。

パターン・ランゲージの作成研究や活用研究が主流である本学会において、本研究の新規性は、パターン・ランゲージの作り手に焦点を当てたことである。本研究によって、一見突飛な立場でパターン・ランゲージを作成・活用したり、唐突にパターン・ランゲージを新しい分野に適用したと思えるような先駆的な作り手たちが、パターン・ランゲージに魅せられ、情熱的に作成し続けている物語を詳細に描き出した。そして複数人の作り手たちにインタビューを実施したことにより、彼らがパターン・ランゲージに魅力を感じている背景には、作り手たちの立場や分野特有の課題意識や信念があり、それは分野や立場、時代を超えて共通しうることもわかった。

さらに日本の作り手に着目したことで、海外のパターン・ランゲージの作り手が知る術がなかった、英語論文で発表していない日本のパターン・ランゲージや、地方自治体や学校で活動している日本の作り手の物語を、海外のパターン・ランゲージの作り手に伝えることができる。そのため本論文は、日本と海外のパターン・ランゲージの作り手の文化交流につながるだろう。また大部分がパターン・ランゲージ作成者である学会参加者にとっても、パターン・ランゲージに魅せられた情熱的な作り手たちの物語から、パターン・ランゲージの可能性や世界の広がりを感じることができると期待している。さらに参加者が、パターン・ランゲージの作り手としての自分の情熱を再考することで、パターン・ランゲージの研究分野のますますの発展につながっていくと考えている。

◆ 発表で得られたフィードバック

発表は、論文を学会参加者 6〜8 名程度に読んでもらい、著者が話せない中フィードバックをもらう「ライターズ・ワークショップ」という形式で行った。今回は 6 名に論文を読んでもらい、フィードバックをもらった。

最初に、論文や研究の魅力的だと思った点が話された。その後、論文を読んでいて困惑したり理解が難しかったところについて共有され、修正や改善が必要な点や今後取り組むべき点について提案された。

今回の学会発表により、日本以外のパターン・ランゲージの作り手や、論文で取り上げた人物たちを知らない人など幅広い視点から、論文への意見をもらうことができた。よりよい論文になるよう、自分自身で吟味しながらフィードバックを反映させる予定である。

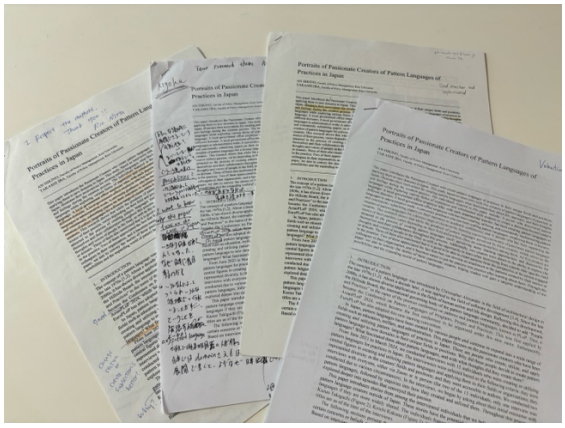
◆ 今後の研究の展開

学会でのフィードバックをもとに論文を修正し、最終バージョンを 2 月 24 日までに学会に提出する予定である。さらに本論文の内容をもとに加筆修正し、自身の卒業プロジェクトとして完成させ、2025 年 1 月 31 日に提出する予定である。

◆ 謝辞

この度は、31st Conference on Pattern Languages of Programs, People, and Practices への参加を援助していただいたことに心より感謝申し上げます。

学会の様子



参加者からもらった

フィードバックが書き込まれた論文